

12. ことばと病理

(第2病理) 梶田 昭

1. 病理学, pathology, *παθολογία* こと始め

初出は Galenos (C.G. Kühn ed. Opera Omnia. Bd. 14, pp. 689-690)

Fernel. J.: Medicina. (1554). Universa medicina. (1567).

この本は Physiologia, Pathologia, Therapeutice の3部から成る. cf. Sherrington, C.: The endeavours of Jean Fernel. Cambridge, 1946.

• *φύσις*+*λόγος* → *φυσιολογία* (physiologia)

• *παθος*+*λόγος* → *παθολογία* (pathologia)

φύσις, *παθος*, *λόγος* はラテン語の *natura*, *passio*, *ratio* で, 中世には *παθολογία* を *ratio passionis* と称した.

passio は *pator* に由来する. *παθος* の原形 *πάσχω* と共に, to suffer という意味である.

2. 病理学の方法

パトスという現象を扱う理法 (ロゴス) として二つの流れがあった.

One very important feature of this ordering process is that we cut up the continua of space and time with which we are surrounded into segments so that we are predisposed to think of the environment as consisting of vast numbers of separate things belonging to named classes, and to think of the passage of time as consisting of sequences of separate events. (Leach, E.: Lévi-Strauss. p. 21)

1) 病気をその特徴によって identify し, 名付けし, これを分けたりまとめたりする. カタログ (*κατά-λόγος*) を作っておいて, 未知のものをそのどれかに入れることによって理解するのである. 言 (こと) 分けである. 18世紀に流行して *nosology* (*νόσος* は病気) といった. ドイツ語の *Krankheitslehre* に当る. 病気の実在性は一般に前提とされている.

2) 還元 reduction (*re-ducere*=to bring back). 対象を細かく分けていってこれ以上分けられないものに達する. これは言分けに対する身分けであって, 分割の最小単位が *individuuum* であり, *atom* (*ἄτομος*) である.

individuuum: in は否定, divide できないものの意.

divido=de (apart)+*uidere (to separate).

ἄτομος は *τεμνω* (to cut, Lat. *seco*) に由来. *ἀ-*は否定で分割の果てにあるものを指す.

Individuum と *Atom* とは *Gehalt* (denotation) は同じでも *Inhalt* (connotation) が違う (Virchow). *Atom* とは本来分けられないもの, 思考の上でも分けられないものであり, *Individuum* は分けるとその本質が失われるもの. Virchow にとっては細胞が *Individuum* であった.

Organism は還元の零点だが, しょせん軸の上の相対的な一点ともいえる.

1) は Platonic, 2) Aristotelian である.

3. 細胞病理学

“病理学は, 医学上の難問を究極的に解明するものではなく, これらの難問を解明する上での重要な問題点を提供するものと考えらるべきである” (吉田富三).

Omnis cellula a cellula—このことを証明するために Virchow は, しかしもう少し多くのことを貢献したようである.

1) 体のどこを見ても細胞から成っており, 結合組織も例外ではない.

2) 細胞の新生はつねに結合組織に由来する.

3) したがって細胞の新生は細胞に由来する.

この Virchow の三段論法の中で middle concept (媒概念) になっている結合組織は, 19世紀前半の生物学の舞台廻しをつとめた *tissu cellulaire* である.

中胚葉機能は生理学で軽視されたこともあり, またそのプロセスが緩慢で形態としてとらえやすいこともあって, 病理学の伝統的なテーマとされてきたもので, Virchow も例外ではなかった. Metchnikoff が中胚葉の消化作用, その発生学的な根拠を明らかにするに及んで, 炎症論は感染を扱う方法になりえたのである.

胃がスープを消化するように, 肺は空気を消化する. Paracelsus はこの文章を鉾夫病 *Bergsucht* の中で書いた. 肺でおこるのはガス交換, と生理学は教える. 敵対者の無い場合, 生体と環境との全き調和を古代人は *ἔρως* と呼んだ. しかし, 肺に異物が訪れた場合, 間葉はこれを処理して *ὁμο-στασις* (*homo-stasis*) を維持する (*ἀγαπή*).

pathos/passio を媒介として始めて *physis/natura* の認識は完結する.